

ベイヤード・テイラーの見たファテプル・シークリーについて

近 藤 治

はじめに

アメリカ人旅行家ベイヤード・テイラーがエジプトを経て海路ボンベイに到達したのは、一八五二年も押し迫った十二月二十七日のことであつた。彼は二ヵ月間で北インド横断旅行を敢行する計画を立て、翌一八五三年の一月三日ボンベイを出発した。彼が採用した主要な移動方法は、駅通用の二輪軽便馬車を乗り換えながら、当時開かれていた郵便用交通路をたどるというものであつた。

テイラーはこの方法で西ガーツ山脈を越え、インドールを経てアーグラに到り、一月二十日過ぎにはデリーに到着した。デリーからさらに北に足をのばしてガンジス川上流のハルドワールの見学を果たしたが、これが終わるとラクナウ、カーンプル、アラハバード、バナーラスと北インドの主要都市を串刺し状に歴訪し、二月二十一日に出港予定地カルカッタに到着、同月二十八日には汽船上の人となつて香港に向かつた。

テイラーはアーグラ滞在中、一日を廃都ファテプル・シークリーの見学に充て、そこで見聞したところを旅行記のなかに興味深く書き留めている。アーグラの西方に位置するファテプル・シークリーは、アクバルの命によつて一五七〇年代に造営された新都であつたが、十余年でラホールに遷都されたため廃都となつたところである。本稿は彼のこの廃都訪問の記録の紹介に主眼をおいている。彼のファテプル・シークリーの記録は短いものながら、一

八五七年勃発の大反乱前の形状を見事に描き出している。またアメリカ人である彼のインドを見る眼は、イギリス人とは違った客観的、親和的な性格を一層多く有しているといふことができる。

テイラーは「アメリカのマルコ・ポーロ」といわれるほど旅行家として有名であつた。⁽¹⁾ 夥しい数にのぼる旅行記の他に、彼は詩人、小説家、翻訳家、文芸批評家としても多くの作品を残しており、アメリカの著名な作家たちの評伝を収めた「アメリカの文人たち」シリーズの一冊に彼も収められるほどであつた。⁽²⁾ しかしながら我が国では、テイラーはむしろペリー提督の率いた第一次日本遠征隊の一員として浦賀上陸を果たし、また琉球本島や小笠原父島の踏査に加わつた人物として知られることが多いのではないだろうか。はじめに、アメリカの二つの人名辞典に主として拠りながら彼の事蹟を簡単に紹介することにしよう。⁽³⁾

一 バイヤード・テイラー略歴

バイヤード・テイラーは一八二五年一月十一日、ペンシルヴェニア州チェスター郡ケネット・スクエア村に生まれ、クエーカー教徒の家庭に育つた。少年時代から作詩を始め、高校時代にフィラデルフィアの新聞に詩を発表した。彼は田舎のクエーカー教徒の世界に飽き足らず、外の世界に強い憧れを抱いた。一八四二年ウェストチェスターに出て印刷工に徒弟入りし、一九歳のとき最初の詩集を発表（一八四四年）。これによつて徒弟から解放されるとともに、同年ニューヨークに出て『ニューヨーク・トリビューン』紙から資金援助を受け、従兄と友人との三人でヨーロッパ旅行に出発した。節約しながら同紙への寄稿に努め、二年間ヨーロッパ各地を旅行、とくにドイツのフランクフルトとイタリアのフィレンツェに長く逗留した。旅行の後半は主として徒歩で移動した。ニューヨークに帰着すると二年間にわたる旅行記をまとめた『歩いて見た情景―ナップザックと杖で訪れたヨーロッパ』（一八四六年）を発表し、その年のうちに六刷を重ね、以後九年間で二〇刷を数えるほどの好評を博した。

テイラーはペンシルヴェニア州フェニクスヴィルに戻り、新聞発行事業に着手したが、一年間続けただけでこの事業を売却し、再びニューヨークに出て一八四八年から『ニューヨーク・トリビューン』紙の文化・雑記欄の編集責任者に採用され、これ以後同紙とは生涯にわたって関係を結ぶこととなった。このころから彼はニューヨークおよびボストンの作家たちと交流し、詩人兼ジャーナリストとして活動をはじめた。カリフォルニアでゴールド・ラッシュが始まると、『ニューヨーク・トリビューン』紙の委託を受けて一八四九年に同地に至り、そこに五ヵ月間滞在、翌年ニューヨークに帰って『黄金郷』（一八五〇年）を発表した。この年の十月、生まれ故郷ケネット・スクエア村の長年の恋人メアリー・アグニューと結婚したが、二ヵ月後に彼女は死亡した。

悲歎と過労によつて憔悴したテイラーは、一八五一年八月にニューヨークを発ち、二年間余にわたるエジプト、アビッシニア、シリア、パレスティナ、トルコ、インド、中国への旅に向けて出発した。上海で彼はペリー提督の艦隊に加わり、艦長補佐役の軍属として一八五三年の春から夏を過ごした。彼は日本遠征の記録を執筆したが、軍務規律によつてそれを出版することは認められなかった。四ヵ月の軍務を終え、広東出港の商船に乗って喜望峰を回り、ニューヨークに帰り着いたのは一八五三年十二月のことであった。この大旅行を終えると、翌年から『中央アフリカへの旅』（一八五四年）、『サラセンの国々』（一八五四年）、『一八五三年のインド・中国・日本訪問記』（一八五五年）というように立て続けに旅行記を公にするとともに、無数の講演を行なった。この時期に発表した詩集『東洋の詩』（一八五四年）は、よく知られた『ペドウィンの歌』をはじめ浪漫的な誇張法を用いた詩を多く収めており、彼の最もよく知られた詩集となった。

一八五六年テイラーは再びヨーロッパ旅行に出、これをもとにしてまたしても『北辺紀行』（一八五七年）、『ギリシア・ローマ紀行』（一八五九年）、『国の内と外に在りて』（一八五九年）の三連作を公刊した。この旅行中、ドイツのゴータにおいてデンマーク系のマリイ・ハンセンと結婚した。彼は自分の故郷の村近くに購入していた農場

に、一八六〇年から妻子とともに落ち着こうとしたが、それも長くは続かなかった。一八六一年に南北戦争が勃発すると、彼は『ニューヨーク・トリビュン』紙のワシントン特派員となった。しかし翌一八六二年には駐ロシア大使館の書記官に任命され、ペテルブルグに赴任。ここも滞在一年ばかりで帰国することとなり、その後は郷里の農場に築いた自分の館宅で小説の執筆に従事した。しかしその評判は必ずしも芳しくはなかったようであった。

一八六七年、テイラーは家族とともに再びヨーロッパ旅行に出た。この旅行の最中に、彼は風邪で発作を起こし瀕死状態を体験した。翌年からゲーテの『ファウスト』の翻訳に従事し、二巻本の翻訳書（一八七〇年、一八七一年）としてこれを出版した。この二巻本は長らく『ファウスト』の最良の翻訳と目されていた。彼はコーネル大学のドイツ文学の非居住（non-resident）教授の地位を一八七〇年から一八七七年まで得て、随時講義を行なった。

一八七八年四月、テイラーは駐ドイツ大使としてベルリンに赴任し、大歓迎を受けた。しかし一年も経たないうちに健康状態が悪化し、彼の地において同年十二月十九日に死亡した。病名は肝臓疾患と診断されていた。遺体はペンシルヴェニア州ロングウッドのクエーカー教徒の墓地に埋葬された。⁽⁴⁾

右に紹介した略歴によって、テイラーは一九歳のときから享年五四歳に未だぬ生涯の間に、ヨーロッパからはじまってアフリカ、アジア各国、各地を幅広く旅行し探検して、その見聞したところを数多の散文や韻文の作品によって書き残していたことが分かる。これは尋常の作家活動の域をはるかに越えたものである。彼は豊かな体力に恵まれていたようで、新聞社の一室で一日一五時間の執筆を続けることができたほどであったという。⁽⁵⁾しかしこうした過度の酷使が強靱な体力を苛み、彼の寿命を縮めてしまったことは否めないであろう。テイラーは数ある訪問地域の中なかでも、東洋にとりわけ深い関心と興味を抱いたようであった。これについては、「彼が住んでみたり放浪してみたりした国々の内で、東洋の国々がこの熱心なロマン主義者を最も完璧な形で虜にしてみたりした」という指摘もある。⁽⁶⁾その東洋の国々の旅行記をまとめたものが『一八五三年のインド・中国・日本訪問記』（以下では『三

『國訪問記』と略記することにする）であつた。

二 ペリー提督遠征艦隊員としてのテイラー

本稿のはしがきで触れたように、テイラーはペリー提督の率いるアメリカ艦隊の日本遠征隊に加わり、インドと中国の訪問の後に宿願の日本訪問を果たした。テイラーのことは、同艦隊日本遠征の公式の報告書のなかでも関連するところではしばしば触れられている。例えば、艦隊の琉球訪問について述べた第七章においてテイラーに関する記述が一度ならず見られる。すなわち、一八五三年五月二十六日艦隊が琉球本島に近づいたところで、報告書はこの島の形状を述べる際に「以下は遠征隊のある士官の筆になる描写である」と断つて、テイラーの日記の一部を引用して紹介している。そしてこれに脚注を付し、テイラーが遠征隊に加わつたいきさつを詳しく述べたペリーの陳述をも併せて紹介している。やや長い脚注であるが、それを全文紹介しておこう。

中国でサスケハナ号に乗り込んだ有名な旅行家、ベイヤード・テイラーのこと。この紳士が遠征隊に加わつたいきさつについて、提督は次のように詳述している。

「私が上海に到着すると、ニューヨークのある地位の高い友人からの紹介状を携えたベイヤード・テイラー氏が待つていた。私の知るところでは、彼は以前からこの艦隊に加わりたいと切に願つていた。というのは、それ以外に日本を訪問する方法がなかったためである。彼はその書状を差し出して同行を願ひ出たが、私はこの申し出を固く拒絶し、遠征開始にあたって民間人の参加を一切認めないという決断を下したことを告げ、これまで艦隊に同行した者のなかで、船員雇用契約者に署名しておきながら、海軍法規のあらゆる拘束や罰則に服した者が少なかったこと、また適当な船室がないため、遠征隊に参加すればほかの非戦闘員とともに多くの不便や不自由をしのばなければならぬこと、さらに海軍省の一般命令によつて公の刊行物または友人らとの

私的通信も禁じられていること、航海中のあらゆる覚書や記録は、すべて政府に帰属するために私が預からなければならぬことを説明した。しかし、それでも彼は、艦隊に加わることに伴うあらゆる困難や不便を十分に承知したうえで、なお参加を請願した。このような執拗な懇願を受け、彼の紳士的で謙虚な態度に好印象を抱いたため、私は不本意ながらついにこの申し出を承諾し、彼はサスケハナ号に乗り組んで、ハイネ氏やブラウン氏と同室することになった。それから短期間のうちに彼は艦隊のあらゆる人員の尊敬を集め、また、たえざる観察とそれをまめに書き記す習慣によって、日本および同諸島での最初の短い滞在期間におけるさまざまな出来事を記録するうえで有用な人材となった。この貢献を彼は心から喜んで行なってくれた。これらの手記が私の報告を準備する際に役立てられたことによって、その功績は認められたと信ずるものである。私の公式通信に述べられた諸事件を説明するいくつかの事柄は、私の同意を得てテイラー氏によって記され、合衆国で刊行するために彼によって本国に持ち帰られた。それらの記述は、彼の最近の著作に使われている。彼の日記の原文は、光栄にも私に委託された。彼の諸記録も無論、特殊任務を遂行するために詳しく記述された他のあらゆる人員の記録と同様に、私に引き渡され、遠征隊の公式の記録に加えられた。」

右のペリーの陳述によって、テイラーが日本訪問を実現するためにアメリカ艦隊の遠征隊に加えられることになったいきさつが実に明快に述べられている。

同書一五四ページの脚注でも、琉球訪問に関する記述の主要部分はテイラーの日記から得たものであることを明記し、事実、このページ以下の本文中にはテイラーの日記からの引用がしばしばなされている。また五月三十日から琉球本島の島内と東海岸の調査隊が派遣されることになり、士官の一人としてテイラーもこれに加わり記録を担当したことが同書一五八ページの本文に記されている。さらに、艦隊が小笠原諸島を訪れたとき、父島（ピール島）の踏査隊二隊を派遣することとなって、そのうちの一隊はテイラーの指揮下に踏査を行なったことが同書二〇

四ページから二一〇ページにかけて記されている。

ペリー艦隊の一員として同じく日本遠征隊に加わっていた中国学者で首席翻訳官となつたサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズの日誌でも、六月十五日のところにテイラーが登場する。ウィリアムズは、父島探検に向けてこの日の早朝、「テイラー氏とファーズ博士をそれぞれ長とする二組の探検班が出発した」と述べている。⁽⁸⁾また画家のウィリアム・ハイネも日本遠征隊に加わり、サスケハナ号ではテイラーと同室であつたことが、先に紹介した公式報告、日本遠征記中のペリーの陳述のなかで触れられていた。そのハイネは自らの旅行記のなかで、琉球本島の調査隊として五月三十日に上陸した隊員たちのなかに「サスケハナ号からB・T氏と私」がいたと記しているが、

このB・Tがベイヤード・テイラーを指していたことはいうまでもない。また六月六日の記述のところで、「九時少し前、テイラー氏と私とは命により、提督の第一カッターで、提督が乗る輿と担ぎ手とを陸へ運ぶことになつた」とも述べている。⁽⁹⁾さらに、ペリーの私日記を編んだ書にサミュエル・エリオット・モリソンが寄せた序説においては、「上海では彼は二八歳の文筆家ベイヤード・テイラーを艦上に迎え……」と記されている。⁽¹⁰⁾

右に紹介したペリー艦隊日本遠征関係の諸文献の記述によつて、テイラーが艦隊所属の軍属として琉球、小笠原を含む幕末の日本に來訪してきたことを多くの人々は知つてゐる。しかしそのことと、彼が数々の大旅行を敢行した著名な紀行作家であり、詩人であり、『ファウスト』の翻訳者でもあつたことを合わせ知ることは、我が国では存外欠落してはいなかつたか。私はそんな氣のすることがある。

先に紹介したペリーの陳述によつて明らかのように、日本遠征隊に参加できるよう働きかけたのはテイラーの側であつた。前年の七月、アラブ諸国旅行中のテイラーがコンスタンティノープルを訪ねたとき、『ニューヨーク・トリビューン』紙本社からの手紙が待つてゐた。その手紙には、ペリーの日本遠征隊に加わるようにとの提案があり、その場合は同紙が資金を提供し、旗艦に乗船できるよう交渉してみる旨記してあつた。しかし同紙とペリーと

の交渉は難行したようで、テイラーはともかく香港にまで渡航し、そこでペリーに会って直接交渉するよう指示された。かくしてテイラーがシンガポールを経由して香港に到着したのは一八五三年三月十六日のことであつた。そして後に到着したペリー提督に上海で会つて、晴れて日本遠征隊に加わることを認められた。彼の身分は掌艦兵曹 (master's mate) であつた。¹¹⁾

テイラー自身は、『三国訪問記』のなかでは日本遠征隊への参加について、次のように簡潔に記しているだけである。

私は旅行の足を中国にまで延ばし、日本への遠征隊に加えてもらえることを強く望んでいた。ペリー提督の到着によつて、アメリカ海軍省が非常に厳格な命令を出し、同省に勤務せぬ者およびその法規を遵守せぬ者は、いかなる者にも艦隊のいずれの艦船に乗ることも許可しない、ということを知つた。「サスケハナ号」のブリヤナン艦長は、書記が付いておらず、ちやうど一人採用のワクを有しているので、その身分でなら同行できるとの実に親切な提案をしてくださった。しかしながら、掌艦兵曹の地位に二人分の空席があり、提督がその採用の権限をもっていたこと、並びに海軍省に当座の間勤務するとの私の熱意が提督の主張していた唯一の反対理由を取り除いてしまったこと、この二つの理由によつて、私は掌艦兵曹になる方の道を選ぶことにした。こうして私は服務誓約書に署名し、極めてありふれた地位の士官となつて、上官には無条件の忠誠を尽し反対に目下の者からは無条件の忠誠を受ける身となつた。¹²⁾

ところで、ここに一部引用したテイラーの『三国訪問記』は、彼の他の多くの旅行記類がそうであるように、ニューヨークのG・P・パトナム社から刊行されたものである。一八五五年八月付の序文があり、本文は五三九ページで、索引はない。全巻四四章で、そのうち半数近い二一章がインド関係の記述に充てられている。中国はこの当時、太平天国運動の最中で、テイラーが期待していたような内陸部の旅行を果たすことができなかった。日本関係

の記述は、三国のうちでも最も少ない。これは、彼の日本関係日誌が海軍入隊時の誓約によってアメリカ海軍省に提出することを義務づけられ、私的に使用することを許されていなかったからである。しかしながら彼は、きれいな好きでさっぱりとした日本人に対して強い賛嘆の気持を抱き、比較的短いその記述は興味の尽きることがなく、かつ貴重である。もちろんインドおよび中国関係の記述も、興味深く貴重であることに変わりはない。

以下においては、はじめに述べておいたように、テイラーの『三国訪問記』中の第九章「ファテプル・シークリーの遺跡」¹³を全文翻訳して紹介することにする。訳文中、原語の表記や簡単な説明、言い換えはパーレン（ ）内に記し、原文にない補足語はキッコー（ ）内に記した。また原文中のパーレンはブラケット「」で示した。

三 ファテプル・シークリー見聞記の紹介

アグラを発つ前に、ファテプル・シークリーの廃墟への遠出を行なった。そこはアグラの町から西方に二二マイルほど離れていた。この廃墟となった都市のもつ歴史的な興味深さ「ここはアクバルのお気に入りの宮殿であった」の点からしても、またその遺跡の広域性や壮大さの点からしても、この地をぜひ訪ねるようにと強く勧められていたので、私はデリーへの出発をやむなく別の日に延期することにした。植民地政庁の書記官をしているシェラー(Sherer)氏が有難いことに私に同伴することを申し出て下さった。彼は当時の歴史によく通じていた。そのため、今や無人の地となったこの廃墟には、かつての住民たちの幻影が私のために数多く住みついてくれることとなった。私には「過去」がこんなにも生々しく再現されたことはほとんどなかったことであった。またその幻影にこんなにもすつきりいかれてしまうこともなかったことであった。この日は、私の日程表のなかで最も幸福な日々のうちに入るものであり、前年に過ごした「エジプトの」テーベでの忘れられない日々とともに記録されるべき値打のあるものであった。

この遠出をまる一日で果たすために、私はあらかじめ配置されていた馬車馬を順次乗り換えながら行くこととし、インド人が使う荷車に似た二輪の軽便馬車（ガリー）に乗って日の出前に出発した。道路は最初の八マイルは広くてよく手入れされており、両側には大きなアカシアや菩提樹、ニームの原木が生い茂っていた。私の乗った馬車は、この地の王侯（ラージャ）たちの所有する囲壁に囲まれた大きな庭園や、ヴィシュヌ神とシヴァ神を祀る祠の立つた小ぎれいな村のなかを通り過ぎた。道路は次第に悪くなってきた。とはいっても、その辺り一帯はなお平坦さが続き、かなりよく耕作されていた。乗り継いだどの馬車馬も、快い早朝の大気に急かされて速足で快調に飛ばし、三時間も経ないうちにファテプル・シークリーが視界に入ってきた。長く延びた赤砂岩の丘陵が西方に姿を現わし、尾根のあちこちには崩れかかった廃墟が見えてきた。丘陵の頂上部は長さ約四マイルにわたって城壁やテラス、尖塔の集合によつておおわれており、そのうちでも壮大な門状建築（ブランド・ダルワザ 高大門）がひとときを目立っていた。その建物は太陽の光をまともに受けて、中空を背にしながら淡紅色に照り輝いていた。

馬車が近づいていくにつれて、丘陵のこの頂上部は赤砂岩製の高い郭壁によつて囲繞されていることが分かった。この郭壁にはノコギリ歯型の墨壁が設けられていた。また幅広の入場門が設けられていて、私の通ってきた道路がそこを貫通していた。郭壁はほぼ完全な形で残されており、上部に向かって傾斜しながら周囲六マイルに及んでいた。郭壁は丘陵の両側に広がる平地の一部をも囲い込んでいた。人氣のない入场門を馬車で走り抜けながら、眼に飛び込んでくる廃墟の堆積物に私は驚愕してしまった。ここは幅が一マイル半程度の狭い丘陵であつて、その高さは平均して約一〇〇フィートであつたが、そこが宮殿やモスク、公共建造物の遺構によつてほぼおい尽くされていた。それらの遺構は、建設された当時と同じようにほとんど完全な形で残っているものもあれば、無造作に積み上げられた切り出し石の山と何ら変わるところのなくなったものもあつた。吹き抜け型のいくつものアーチの上ののっかるようにして建てられた無数のパビリオンや、半球型の屋根、それに小塔群が、この画趣に富んだ混沌のなか

から聳え立っていた。だが、すでに述べた巨大なブランド・ダルワーズがカルナク (Karnak エジプトのテーベ北部の遺跡) の塔門と同じように、並はずれた大きさですべての建造物を圧倒していた。丘陵の斜面に沿って次々と建てられている一連のアーチ付きのテラス風建築は、バビロンがもっていたようなある種の野生的な荘重さの雰囲気はこの地にもたらしていた。この野生的な荘重さは、マーティン (ジョン・マーティン John Martin イギリス人画家 一七八九—一八五四) の描いたバビロンの絵にその痕跡を止めている。しかしここファテブル・シークリーには、厳肅さないし厳めしさといったものは何もない。鮮やかな色をした赤砂岩の建築群が、あちこちでその金色の尖塔を輝かせながら太陽の光をいっぱい受けていた。そして雲ひとつない大空の下に立ち並んでおり、日陰があまり見られないために遠近感がほとんど感じられなかった。丘陵の麓にある現在のファテブルの村は美しい樹々に包まれており、また当時の郭壁内に広がる平地部は生育中の小麦畑におおわれて緑色をなしていた。

私の乗った馬車は、うねうねと曲った長い通りを通り過ぎていった。その際にこの土地の商人たちが持ち合わせていた商品を壊わしてしまう恐れが多分にあった。なぜならば彼らが通りの両側から迫り出している店板と店板との間は、私の乗っていた二輪馬車の幅よりも辛うじて広い程度に過ぎなかったからである。そんなことがあった後、道を間違えてしまった御者の愚かさの所為で私は元来た道を引き返さざるをえなくなり、挙句の果ては徒歩で丘陵を登る羽目となった。アクバルの重臣の一人であったラージャ・ビールバルの館でシェラー氏と会った。彼は昨夜のうちに駕籠に乗ってこちらに来ていたのだった。この館は見事な建築物で損傷はほとんどない。この地を訪ねる訪問者たちの便宜のためにテーブルや椅子、カーペットなどが備え付けられていた。二階にはアーチ型天井の涼し気な広間があつて、そこにテーブル・セットが用意されており、シェラー氏の使用人たちがラージャの使っていた台所で朝食を準備していた。私とシェラー氏はこの館の重厚な石造りのテラスに座つて、食事の準備を待った。アクバルの居住用の宮殿は左手の方角にあった。巨大なダルガー (聖者廟) つまりシャイフ・サリーム・チシュティ

一の廟⁽⁴⁾は右手にあり、私たちが目にした人気のない四辺形の中庭には崩壊のあとは何も認められなかった。敷石で舗装された中庭はその一部に草の生えているところがあつたが、この中庭を囲むアーチ型列柱の回廊はどの一角も崩落しているところはなかった。三世紀前のファテブルが不思議にも昨日のもののように見えた。宮殿は放棄されたが、崩壊したのではなかった。そこにいた君主は死去したのではなく、目下不在であるだけのように見えた。私はまるで自分がビールバルの居室への侵入者であるかのような気がした。そのために仮に銀製の槍をもった番兵⁽⁵⁾がいきなり現われて私を追ひ出そうとしたとしても、私はさして驚くことはなかったであろう。

この地の監視人は顔艶のよい年をとつたイスラーム教徒であつた。シャイフ・バシャーラト・アリーと名のるその男は、私のところにやってきて挨拶を述べ、遺跡の案内役をしてくれることになった。彼は白くなつた口髭をつけた、立派な体格の五十五歳の男であつた。その顔付きは、非常にお人好しで愛想のよい人柄であることを伝えていた。ターバンを被り綿製のガウンを左肩で結えていたので、滑らかな広い胸部の左側をあらわにしていた。ヒンドゥー教徒とパルシー（拜火教徒）は、ムスリムとは反対に右肩の上でガウンの紐を結ぶ。バシャーラト・アリーは非常に敬虔なイスラーム教徒で、クルアーンをアラビア語でほとんど全部^き誦^きずることができた。私がアラビア語で話しかけると、彼は大いに喜んだ。これ以後彼はのべつなく祈禱文を反復し、クルアーンの章節を朗唱して、自分がいかに多く知っているかを私に分らせようとした。ファテブル・シークリーに関する彼の知識は、シェラー氏よりもはるかに劣つていた。シェラー氏はアクバル時代の歴史を丹念に調べていた。とはいえ、我々がこの廢墟の都城を散策している間、バシャーラト・アリーは愉快な同伴者となつた。その結果、我々は彼がいつもと同じように自分の知っている物語や伝説を語り終えるまで聞かざるをえぬ羽目となつた。

朝食をすませた後、私たちはファテブル・シークリーの綿密な調査に取りかかった。最初に述べなくてはならぬことは、ファテブル・シークリーはアクバルの郊外の宮城であり、ウインザー城がロンドンに対して有するのと同

じ關係をアーグラに対して有しているということである。この宮城は一五七一年に完成し、十二年間アクバルの宮延はここにあった。その当時ここは人口の多いところであつたに違ひない。だが下層階級の人々の住居は、今日と同じように恐らく土造りの小屋から成つていたことであろう。なぜなら丘陵を取り囲む平地には廃墟の跡がほとんど残つていないからである。貨幣鑄造所やその他の公共建造物が大規模に残つていゝことは、ここが單なる避暑用の宮城といつたものではなく、當座的な首都と考えられていたことを示している。

私たちは皇帝用の宮殿の調査から開始することとし、まずはキリスト教徒の皇妃にあてがわれていた独自の館を訪ねることにした。この館は、他のイスラーム教徒用の建物とは異なつて、明らかにペルシア人画家によつて描かれたフレスコ画によつて壁面全体が被われている。これらのフレスコ画はフィルドゥーシーの『シャー・ナーマ』に述べられている英雄ルスタムの冒險を描いたものであるといわれている。しかしながら扉の上や窓の上の壁に設けられたいくつかの壁龕には、別の種類の絵が描かれており、宗教的な意味をもつてゐることは間違ひない。ヒンドゥー教の神々や女神たちたとえば象頭のガネーシャやマハーデーヴァ、ラクシュミーの神々の描かれたところもあるが、他方では二枚の嵌め板の一枚に、ほとんど剥げ落ちてはゐるがそれでもなお受胎告知を描こうとしていたことが十分に分かる絵が描かれてゐる、といった具合である。宗教問題についてアクバルがとつた自由な姿勢はよく知られてゐる。だが私は、この絵が示してゐるほどまでの豊かな寛容さがアクバルにあつたとは思つてもゐなかつた。この館の裝飾圖案のなかには、ギリシア十字がめざらしくはない。伝えられるところでは、イエズス会士たちがアクバルの保護を願ひ出たとき、彼は次のように返答したという。「君たちはどうしてもらいたいのかね。見てごらん、余は君たちが君たちの教会に掛けてゐるよりも多くの十字架を余の宮殿に掛けてゐるのだぞ」。

宮殿の建築群は丘陵の尾根の部分をおおつてゐる。そして両側の何マイルにもわたる豊かな平原越しに、その建

築群は素晴らしい景観を呈している。宮廷建築やパビリオン、小き目の館、門、貯水池、噴水、テラスなどが一大迷宮をなしており、それらの配置について明確に把握することは私には難しかった。ほとんどすべての建造物は非常によく保存されているので、さしたる費用をかけなくてもこれらを人が住めるようにすることは可能であろう。学者や詩人にとって、私はこれ以上に快適な居住地を思い浮べることはできない。キリスト教徒王妃の館の近くにはパンチ・マハル（五層閣）が建っている。これは方形の平面床の五層によつて構成される建物で、夥しい彫刻の施された柱で支えられた各床はピラミッド状に次々と上に重ねられていき、最上層は相当な高さに至っている。シェラー氏の考えでは、宮殿関係職員たちのための睡眠所であつたであろうということである。⁽¹⁶⁾この建物の向う側には砂岩の大きな石板を敷き詰めた中庭があつて、そこには巨大なパッチーシー双六⁽¹⁷⁾の目が描かれている。このことはアングラ宮殿について語つた際に、すでに述べたところである。また中庭の一角には特異な設計のなされた迷宮のような建物があつて、そこは宮中の女性たちがかくれんぼに興じたところであつた。少し離れたところには礼拝所風の建物がある。二階造りで、屋上にはいくつもの頂塔がのつかつている。しかしながら中に入つてみると、高い丸天井の一階造りに過ぎず、中央にただ一本の柱がドーム状の天井に向かつて伸びていき、二階の窓の高さにまで達していることが判明する。この柱には、彫刻の限りを尽した巨大な柱頭がある。柱の直径の三倍もあろうかと思われるこの柱頭から、建物の四隅に向かつて石造りの四本の通路がそれぞれ通じており、四隅に四分円の形をした小さな広場が設けられている。伝説によると、この建物は科学や宗教問題を討議するところとしてアクバルが使用した。⁽¹⁸⁾彼は中央の柱の柱頭に座を占め、重臣たちは建物の四隅に座していた、という。

ファテプル・シークリーの宮殿には、入念に彫刻の施された石造りのピラミッド型天蓋を有するパビリオンがある。この建物は四柱によつて支えられており、各柱の柱頭の上にはヘビを表象した特異なデザイン天井蛇腹が設けられている。このパビリオンは、巨大なイスラム風建築としてのこの宮殿建築の性格からはみでないように

しながら、できるだけヒンドゥー風の建築に近づこうとしている。この建物は、アクバルが恐らくは政策上の動機から自分の身近かに囲っていたグル、つまりヒンドゥー聖者の居所であった。コンスタンティノープル出身王妃の館は、非常に手の込んだ彫刻だらけの館である。この建物の内部には彫刻のない一インチ四方の石とてまづは見つけ難い。同様のことはこの宮殿のほぼ全体について言えそうである。ビルバルの館についても同様であつて、ここでは無数の彫刻が溢れ返っている。そして装飾の新しい組合せを生み出すような工夫が極度に凝らされているように見受けられる。あらゆるものが砂岩に実に見事に、しかもこじんまりと彫刻されているのだ。そのために、人為的に損傷されたところを除けば、今でも彫刻された当時とほとんど変わらないほど鮮明な様相を呈している。ファテプル・シークリーに注がれた労力の総量に比べれば、アルハンブラ宮殿の繊細なスタッコ細工も顔色なしである。ファテプル・シークリーは私がこれまでに目にしたいかなるものとも似ていない。にもかかわらず、この壮麗な廃都の名称さえも、私はインドに到着するまで知らなかったのだ。エジプトを別にすれば、ここを凌ぐ遺跡はいずれにもないというのに！

内謁殿と公謁殿と造幣所の見学はやや急いで行なつた。造幣所は巨大な四角形の建物で、その半分は廃墟の残骸で塞がれていた。公謁殿にはバルコニーがあつて、そこでアクバルは毎朝公衆に自分の姿を見せるのが常であつた。人々は公謁殿の中庭で皇帝に拝謁したり陳情したりする機会を待つていた。アクバルはこうした時に「アッラーフ・アクバル！」（神は偉大なり、の意）と大声で挨拶され、それに対していつも「ジャッラ・ジャラールフ！」（神の栄光は至高たり、の意）と応えていた。これは彼自らが考えだした挨拶法であつた。なぜならば、これらの挨拶には彼の名前ジャラールッディーン・アクバル含まれているからである。私はポヘミアでこれと非常によく似た挨拶法をしばしば耳にしたことがある。その挨拶法というのは、「ジーザス・キリストに誉れあれ！」に對し返答は「永しえに、アーメン」というものであつた。

ビールバルの館の北側、丘陵を少し下ったところに有名な「象門」がある。アクバルは一時この地に要砦を造るつもりで、この門の建造を始めた。この門は極めて優美な造りであつて、両側には八角形の稜堡を擁している。しかしながら、皇帝の信頼の厚かった聖者シャイフ・サリーム・チシュティイがそのような計画が実行されれば自分はこの地から去つてしまうと脅したので、要砦案は断念された。象門の両脇には、高い台座の上に巨大な象の石像が置かれていた。だが両方の象はどちらも鼻を失くしていた。鼻でなければ足を切断されたはずである。舗装された急な坂道が、階段状に造られたアーチ付きテラス式庭園を横切つて、丘陵の下にある「象の塔」(Elephant's Tower)へと通じているが、途中で廃墟の残骸がしばしば進路を妨げていた。この塔はおおよそ九〇フィートの高さがあり、上から下まで象の牙が植込まれていた。この塔が何を意味しているかについてはさまざまな意見があるが、アクバルがお氣に入りの象の墓の上に建てたというのが一番もつともらしい推測である。土地の人たちは、これをヒラン・ミナール(Hiran Minar 羚羊の塔の意)と呼んでいる。

すでに午後の二時になっていたが、有名なダルガーをまだ見ていなかった。そこで私たちは坂道を引き返し、丘陵の頂上部に登った。そこには巨大な四角形の要砦のような廟墓があつて、アクバルの宮殿よりも高く聳えていた。私たちは長い石段を登つて矩形の中庭に入つていった。そこは実に広々とした対称的な造りをなしており、裝飾も実に見事であつたので、私は驚嘆してしまつた。思い浮かべてみるがよい。長さ四二八フィート、幅四〇六フィートの敷石で覆われた中庭があり、高さ五〇フィートの列柱式回廊で取り囲まれていた。そして世界中で最も壮大な門の一つに数えられる一二〇フィートの高さのブランド・ダルワザをくぐると、その一方の側には三つのドームを冠したモスクがあり、中央部には大きな水槽と噴水が設けられ、もう一方の側には大きな入場門が配されている。そして真珠層と大理石でできたシャイフ・サリーム・チシュティイの廟は、宮殿のミニアチュア版のようであり、建物全体が水晶のようにきらめいている。この建物は頂上部に金箔の貼られたドームと象牙細工の施された

柱を有し、大理石の裝飾物には見事な花柄の渦卷の象眼が散りばめられている。巨大なブランド・ドルワーズを備えたこの中庭は、そのなかに建てられている大切な建造物をただ守ることだけを目的として建築された、魔法の要砦であるかのように見えた。

シャイフ・サリーム・チシュティーは傑出した聖者であつた。彼は虎と仲がよいことで有名であつた。何頭かの虎は、現在彼の廟が建てられている丘にあつた洞窟で彼と一緒に住んでいた。彼の名声が伝えられると、アクバルはこの聖者が紛うかたなき高潔さ、それに並々なぬ叡知を備えた人物であると見抜いたので、彼の居るところの近くにファテプル・シークリーの宮殿を建築したといわれている。語り伝えられているところでは、アクバルは重大な事態となつた時にはいつも彼に相談し、ついには自分の後継ぎを得ることまでも彼の助けを受けることになつた。アクバルは即位後しばらくの間、皇子に恵まれることがなかつた。そこでアクバルは皇子に恵まれるかどうか聖者に二度尋ねてみたが、聖者の返答は二度とも「否、そのような定めとはなっていない」というものであつた。その当時、聖者には生後六カ月の男児がいた。彼のようなムスリム聖者たちは、独身主義者ではなく妻帯してゐたのである。アクバルが三度目にやつてきて同じことを尋ね同じ返答をえたとき、両者の会見中揺り籠のなかに入れられてその場に居合わせていた幼児は、それまでは片言もしゃべることがなかつたのに、突然次のように語つた。

「お父さん、世界の征服者をどうして失望させて送り返すの?」「どうしてつて」といつてサリーム・チシュティーは予期せぬ質問に少なからず驚いたが、次のように答えた。「この方には男の子が生まれる定めとなつていないからだよ。別の子供がこの方の男の子のために命を譲るのではなければね。でもそんなこと誰ができる?」幼児は次のようにいつた。「お父さん、もしお許しくださいのなら、私が死にましよう。そうすれば皇帝に男の子が生まれるのでしう」。サリーム・チシュティーが同意を伝える以前に幼児は死んでいた。この同じ日に皇位の後継者が胚胎し、やがて月日が満ちて生誕した。しかしながら陰口を叩く者はいるものである。彼らの言によれば、これ

は眞実を覆い隠すための一種の寓意物語である。サリーム・チシュテイーはアクバルに後継者を約束した際、実のところは自分の息子を生きたまま譲ったのである、というのである。真意の程は別にして、アクバルの皇子ジャハーンギールは即位するまでサリームの名前で呼ばれていた。

私たちは、サリーム・チシュテイーの墓石の周りを取り囲んでいる聖廟内の回廊に入って内部をのぞき見ることは許されたが、回廊からさらに内側に入ることは許されなかった。墓石と、その上部六フィートの高さに設けられた天蓋には、いずれも真珠層が用いられている。床は碧玉製である。白大理石製の壁には紅玉髓が象眼されている。絹糸と金糸を織り込んだ布が聖体布のように墓石を覆っており、その上に作られたばかりの花輪や萎んでしまった花輪が置かれていた。この建物の周りに設けられた大理石の透かし彫りは、インドで最も見事なものである。これらの透かし彫りは、それぞれ約八フィート四方の大理石の平板の一枚一枚に実に込み入った模様を描き出している。織機で織られたものだと言われかねないような出来具合であった。サリーム・チシュテイー廟よりも以前に創建されていたモスクは非常に優美な造りで、アルハンブラ宮殿のアベンセラージの間に幾分似たところがある。とはいっても、このモスクの規模の方がはるかに巨大である。またこのモスクは漆喰造りではなく白大理石造りである。案内人のバシャート・アリーのいうところでは、サリーム・チシュテイーの廟は彼の死去の際に残されていた彼の遺産によって一年間のうちに建設され、要した費用は三七〇万ルピーすなわち一七五万ドルであった。²⁰⁾

私たちはブランド・ダルワーズの頂上まで登っていった。ファテプル・シークリーおよびその周辺地方の全景を眺めるためである。三六〇度の全景は広大な平原で、私たちの眼の届く地平線は半径二〇マイルのところまでぐるぐるとのびていた。鮮やかな円形の緑色をした小麦畑の地平線であった。そこかしこにはマンゴー果樹園が点在し、また灌漑用運河あるいは川の青い光の帯が伸びているのが時折眼に入ってきた。西の方角にはいくつかの低い丘陵があり、バートブルの有名な城がこの方角に卡うじて姿を見せていた。この方角に広がる地方は庭園的要素が

少な目ではあつたが、ナイル川流域の平原を思い起こさせるものがあつた。何年か前までこの地方はすべて未耕作の荒蕪地であつた。北西州 (North-Western Provinces)⁽²²⁾ の元副知事であつたトマソン氏は、さる日たまたまファテブル・シークリーを訪れた際に、住民の一人が次のようにいうのを耳にした。アクバル時代この地方は毎年河川の氾濫に見舞われ、そのためにファテブル・シークリーの宮殿はまるで湖のなかにあるかのようにでた、と。「ならば、私もこの地方を浸水させようではないか」と副知事は応じた。そこで彼は、バートブルの近くでヤムナー川に合流している小さな川の堤防を決壊させる命令を下した。そのため雨期が到来したとき、およそ二〇平方マイルの土地が冠水した。この年住民たちは、この地方でそれまでに聞いたこともないような多量の収穫をあげた。だが熱病も広がり、八〇〇人の犠牲者を出した。しかしながら、副知事は洪水を防ぐための運河を通すことによつてこの事業を完遂させた。そのため、今ではこの地域は健康状態を取り戻し、そのうえ大収穫を上げつづけている。

私たちがビールバルの館に戻ると、使用人たちは私たちの見学中の間に昼食を用意してくれていた。バシャーラト・アリーはアラブの恋歌を唄い、アクバル時代の物語を語ってくれた。そのうちのいくつかは、うまく再話することが容易ではない。東方の物語のほとんどすべてがそうであるように、バシャーラト・アリーの語ってくれた物語は入り込んだ話の筋をもつものであつたからである。しかしビールバル自身に關係する物語に例外的なものがあつた。そこでこの物語を、バシャーラト・アリーの言葉に従いながら再話することにしよう。ただし、際限なく繰り返される決り文句は省略している。

「ある日」とバシャーラト・アリーは語りはじめた。「アクバル帝とラージャ・ビールバルとがともに着座していた。アクバルがビールバルにいった。『汝に大きな不幸が襲つたとき、汝はどうするか』。ビールバルは答えた。『私は楽しいことに身を委ねるでしょう』。『汝にはすでに不幸が襲つていふことになつてゐるのに、いかにして楽しいことに身を委ねるのか』。『それでも私はそうするのです』とビールバルはいった。翌日アクバルはビー

ルバルにいった、『このルビーを受け取って、余が戻すようにいうまで保管しておけ』。ところでそのルビーというのは何百ルビーもするもので、後にも先にもこの世になかったような代物であった。そこでビールバルはそのルビーを持って帰って娘に預け、アクバル帝のものであるので大切に保存しておくように命じた。娘はルビーを収納箱に入れ、三つの錠前を付けて鍵をかけた。

「それからアクバルは、死刑が宣告されている当地最大の盗賊のところに使いをやり、彼の前に連れてこさせた。アクバルはいった、『盗賊よ、もしお前が余のために一仕事できれば、お前の命を助けてやろう』。『どんなことでしよう』と盗賊は尋ねた。『余の大臣のビールバルのところから、余が彼に保管しておくようにいつけておいたルビーを盗むのだ』とアクバルはいった。盗賊は承諾した。彼はこの言い付けを果たすために市内に入っていくと、非常に悪賢い小柄な老女をただちに呼びにやらせた。この老女ほど悪賢い女は誰もいなかった。とはいいまでも」といつてから、バシャーラト・アリーはいたずらっぽく眼を輝かせながら一息入れた。そしてまた続けた。

「今も何人かはいますね、イブリースの好敵手のようなのがね。それはさておき、この小柄の悪賢い老女はビールバルの娘のところに行つて手伝い人となり、次第に娘の信頼を実に巧妙に獲得するようになった。そのため娘は三つの錠前付の収納箱を開けて、ルビーを老女に見せてしまった。そこでどうなったかといえ、老女は鍵を盗み、錠前を開け、ルビーを盗み出してこれを盗賊に与え、盗賊はそれをアクバルのところへ持つて行つた。そうするとアクバルはそのルビーをヤムナー川に投げ捨て、ビールバルを呼びにやらせた。『余のところにルビーを持つてこよ』とアクバルが命じた。『かしこまりました』ビールバルはこう返答して、家に引き返しルビーを持つて行こうとした。だが何としたことだろう、ルビーは盗まれていたのだ！『さて、ルビーはどうした？』とアクバルは尋ねた。『陛下には一五日間お待ちいただきたく存じます』。『よからう』と返答した後、アクバルはつけ加えた。『だが汝の首はルビーにかかっていることを忘れるな』。

「ビールバルは家に帰って、娘にいった。『私たちが生きておれるのは僅か一五日間だ。残された日々を陽気に過ごそうではないか』。そこで彼らは食べて飲んで、宴会や舞踏会を開き、一二日間のうちに何十万ルピーものお金を費やしてしまった。もはや食物を手に入れるパイサー²⁴のお金も彼のものにはなかった。このような状態で彼らは二日間過ごした。一五日目の朝、ヤムナー州で漁をしている漁師の娘が父親にいった、『お父さん、ラージャ・ビールバルとそのお嬢さんは、この二日間何も食べるものがありません。朝食用にこの魚を差し上げましょう』。そういつて、漁師の娘はビールバルたちのところへ魚を持って行つた。ビールバルの娘は大いに感謝してそれを受け取り、早速それを料理した。二人がその魚料理を食べていたとき、ビールバルの口のなかに小石が入つた。彼がそれを手でつまみ出してみると、なんとそれはルビーだった！翌朝ビールバルはアクバルのところに伺候して言上した。『お約束通り、ルビーを持つて参りました』。アクバルは大いに驚いた。しかし事の次第を聞き終えると、ビールバルに二〇〇〇万ルピーを与えて、こういつた。『汝は真実を語つた』。確かに、不幸のときには嘆くよりも楽しむ方がましであつた』。

この物語の寓意は、幾分稚拙な形で示されている。だが話の筋は「ポリュクラテスの指輪」⁽²⁵⁾に似たところがあつて珍奇である。この物語は、バシャーラト・アリーが實際話した時には、ずっと長いものであつた。

シェラー氏は駕籠に乗つて夕方帰るというので、私は彼に辞去し、バシャーラト・アリーと握手し、それから馬車でゆつくりと丘陵を下つて城門を出た。およそ二マイルほど進んだとき、太陽が深紅の幅広い光の帯のなかに沈んでいった。私が最後に目にしたファテプル・シークリーの姿は、深みを増す光沢を背に受けて、雄然と左右に伸びた二筋の黒い縞のようであつた。けれどもその建築群のなかで過ごした一日を、私はいつまでも心に留めていくこととなろう。

おわりに

以上、バイヤード・テイラーの略歴とテイラーとペリー遠征艦隊との関係の経緯について略説し、然る後にテイラーのファテブル・シークリー見聞記全文の紹介を行なった。この小論を結ぶに際し、最後にテイラーに関し二つのことを指摘しておきたい。

一つは、テイラー同様に同じころ『ニューヨーク・トリビューン』（また『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』とも。日刊紙として周知されているので「デイリー」を省いた紙名で称される場合が多い）紙の通信員となっていたマルクスが、テイラーのインド旅行についてはよく知っていたことである。マルクスは一八五四年四月二十二日付のエンゲルス宛書簡で、自分が寄稿した論説の執筆料が安いとこぼし、これに対してテイラーのインド旅行には大金の支払われていることを次のように皮肉って述べている。

『トリビューン』は最近また僕の論説をすべて社説に取り上げて、がらくただけを僕の名前入りで掲載した。

たとえば、オーストリア財政の詳細な叙述、ギリシアの蜂起に関する論説等が横領されたのだ。そのうえ君の軍事論文で法螺を吹くことが「立憲」のようになってゐる。僕は――このまえの僕の警告状にたいするデーナ（『ニューヨーク・トリビューン』の編集者チャールズ・デーナ）の返事が来しだい――報酬の値上げを断然提案するつもりであり、また特に軍事論説のためにかかった費用を請求するだろう。君はそう考えないか。奴らは論説一篇にたいし少なくとも三ポンドは支払うべきだ。奴らはテイラーをインドへ派遣するのに五〇〇ポンドを支払っている。しかも奴は、僕がここ（ロンドン）から同じテーマについて彼らに書き送るより、もっと拙劣に、もっと僅かしか書いていないのだ――あのような国を大急ぎで旅行してまわっても、なにがわかるものか。²⁶

マルクスは『トリビューン』紙が自分に支払う執筆料の低額さを憤る余りに、テイラーの紀行文に対してもつい辛辣になってしまったようだ。逆にいえば、テイラーの方もマルクスの寄稿した論説をよく読んでいたはずである。とりわけ一八五七年の大反乱勃発前後から、マルクスは長大な論説を次々と同紙に精力的に発表していたので、テイラーも強い関心をもって読んでいたはずである。

第二の点は、文人としてのテイラーの評価の変化の問題である。テイラーの評伝によると、彼は多才多作の文人として生前から高い評価を受けていた。そのために、すでに指摘したように、「アメリカの文人たち」シリーズに彼も加えられたほどであった。このシリーズでテイラーの評伝を担当したアルバート・H・スミスも評価の変化について触れていないのではなかったが、もっと明解に断言したのは、同じく彼の評伝を新たに書き起こしたポール・C・ワーマスであった。ワーマスは、テイラーの評価が彼の死後急激に変化し、下向きになっていったのは何故かというテーゼを設定し、テイラーの生きていた時代がイギリスの「ヴィクトリアニズム」(Victorianism)に対応するアメリカの「お上品の遺風」(Genteel Tradition)の時代であり、テイラーは疑いもなくこの遺風を最もよく体現していた人物の一人であったからだ、というように主張する⁽²⁷⁾。この問題はテイラーの著作を読む際に無視することができないであろうが、ここではただ指摘するだけに止めておきたい。

註

いた。

- (1) *Encyclopedia Americana*, Vol. 26, Banbury, 1986, p. 329.
- (2) Albert H. Smyth, *Bayard Taylor, American Men of Letters*, Boston and New York, 1896. この書は佛教大学図書館を通し立教大学図書館蔵書を利用させていた。
- (3) *Dictionary of American Biography*, Vol. 18, New York, 1936, pp. 314-316; *American National Biography*, Vol. 21, New York and Oxford, 1999, pp. 353-354.
- (4) Paul C. Wernuth, *Bayard Taylor*, New York, 1973 の巻末 (pp. 189-194) には、数多いテイラーの作品が

分類して一覽化されており、また研究書一覽も添えられてゐる。これによつて、本文中で取り上げた彼の作品の原題等を念のために登場順に紹介してゐよう。なおこの書は、注(2)の書同様に佛教大学図書館を通じて立教大学図書館蔵書を利用をせていただいた。両書の利用を許可していただいた立教大学図書館に厚く御礼申し上げます。

Views Afjoot: or Europe Seen with Knapsack and Staff, New York, 1846.

Eldorado, or, Adventures in the Path of Empire, New York, 1850.

A Journey to Central Africa, or Life and Landscapes from Egypt to the Negro Kingdoms of the White Nile, New York, 1854.

The Lands of the Saracens; or Pictures of Palestine, Asia Minor, Sicily and Spain, New York, 1854.

A Visit to India, China, and Japan in the Year 1853, New York, 1855.

Poems of the Orient, Boston, 1854.

Northern Travel: Summer and Winter Pictures of Sweden, Denmark and Lapland, New York, 1857.

Travels in Grece and Russia, with an Excursion to Crete, New York, 1859.

At Home and Abroad: A Sketch-Book of Life, Scenery and Men, New York, 1859.

Faust, A Tragedy, by Johann Wolfgang von Goethe, Part I, Boston, 1870.

Faust, A Tragedy, by Johann Wolfgang von Goethe, Part II, Boston, 1871.

(5) William F. Trent et al. (eds.), *The Cambridge History of American Literature*, 4 vols., New York and Cambridge, Vol. II, 1921, p. 40.

(6) *Ibid.*, p. 39.

(7) Francis L. Hawks (comp.), *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States*, Vol. I, Washington, 1856, reprint, New York, 1967. 株式會社オノニス宮崎訳『ペリー艦隊日本遠征記』全三巻、栄光教育文化研究所、一九九七年第一巻、一五二ページ。翻訳書は各ページが原書と完全に対応するよう工夫を凝らしてゐる。

(8) Samuel Wells Williams, *A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853-1854)*, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 37, No. 2, Tokyo, 1910. 河富雄訳『ペリー日本遠征随行記』雄松堂出版、一九七〇年、六三三ページ。

(9) William Heine, *Raise um die Erde nach Japan, an Bord der Expeditions-Escadre unter Commodore M. C. Perry in den Jahren 1853, 1854 und 1855, unternommen in Auftrage der Regierung der Vereinigten Staaten*, Leipzig, 1856. 中井晶夫訳『ペリー世界周航日

本への旅』雄松堂出版、一九八三年、二七、三七ページ。

- (10) Roger Pineau (ed.), *The Japan Expedition 1852-1854: The Personal Journal of Commodore Matthew C. Perry, with an Introduction by Samuel Eliot Morison*, City of Washington, 1968. 金井圓訳『ペリー日本遠征日記』雄松堂出版、一九八五年、一五ページ。なおこの書には巻末付録Cとして「日本遠征（一八五二—一八五五年）関係士官および下士官一覧」（邦訳書四五八一—四七七ページ）が翻訳して収められており、大変有用である。この一覧はアンサ・ユルニス・カード（Anta Eunice Card）が編纂したものとされるが、ベイヤー・テイラーの項を見てみると「軍属、香港で参加」となっている。しかしペリー自身が公式報告書のなかで述べていたように、またモリソン教授が右の序説で述べているように、「香港」は「上海」が正しい。
- (11) Smyth, *op. cit.*, pp. 92-93; Wernuth, *op. cit.*, pp. 48-49.
- (12) Bayard Taylor, *A Visit to India, China, and Japan, in the Year 1853*, New York: G. P. Putnam & Co., 1855, p. 361.
- (13) *Ibid.*, pp. 116-129.
- (14) テイラーが巨大なダルガーと見たのは、実際はファテプル・シークリーの金曜モスクである。サリーム・チシユ・テイーの廟は、このモスクの広大な中庭の一角に白大理石造りで建てられている。
- (15) 原文では choddar となっているが、チャオキダー
- ル (chakridar) の間違いであろう。
- (16) 各階の柱間には、レース状に透かし彫りのされた大理石の薄板が目隠し用に張り巡らされ、そこで宮中の女性たちが宮城内の諸行事を見物したところ、というのがパンチュ・マハルの一般的な説明である。
- (17) パッチシー (pachisi) は数字の二五を意味する。賽子代りにタカラガイを用いた双六で、最高の目が二五であったところからこのように呼ばれる。
- (18) 今日では、この建物は内謁殿 (dewan-i-khas) であつたと考えられている。
- (19) Hall of Abencerrages スペインのグラナダに造営されたナスル朝王宮内の建築。十四世紀の作。「獅子の中庭」の南側に位置し、アラベスク装飾の粋を凝らしている。
- (20) ここから換算すると、当時の一米ドルは二・一四ルピー、概算で二ルピー強ということになる。
- (21) Bharatpur 十八世紀前半にジャート族が独立してアングラの西方に築いた王国、およびその都城の名称。英領時代も藩王国として存続した。
- (22) 英領時代の北インドの州名。諸地方を順次併わせて形成された州であつたため複数形の表示名をとる。ボンベイ州やマドラス州と違い、当時この州の最高行政責任者は副知事であつた。
- (23) Idhis イスラーム神話上、人間を惑わす悪魔。
- (24) paisa 貨幣単位。かつては四パイサーが一アーナー、一六アーナーが一ルピーであつた。日本の銭に相当。

(25) ポリュクラテス (Polycrates) はギリシア、サモス島の僭主。紀元前五二二年ごろ、ペルシアのサトラップによつて磔の刑に処された。ヘロドトスの『歴史』に指輪と魚に関する彼の挿話がある。

(26) 『マルクス・エンゲルス全集』第二八巻、書簡集一八五二—一八五五、大月書店、一九七一年、二八〇—二八一頁。Iqbal Husain (ed.), *Karl Marx on India*,

New Delhi, 2006, prefatory note by the editor, pp. xvi-xvii; でもマルクスのこの書簡は取り上げられ、紹介されている。この書の編者イクバル・フサインによれば、テイラーのインド旅行の紀行文は『トリビューン』紙上に彼の署名入りで順次掲載されていた。従つてマルクスもロンドンでそれを読んでいたのである。

(27) Wermuth, *op. cit.*, preface.